

創造から新天新地へ—24章でたどる神の救済史

10章 「新しい契約」

エレミヤ書31章

1. はじめに

(1) これまでの流れ

- ①創造 (創1章)
- ②墮落 (創3章)
- ③アブラハム契約 (創12章)
- ④出エジプト (出12章)
- ⑤荒野での律法付与 (出20章)
- ⑥約束の地の征服 (ヨシ1章)
- ⑦ダビデ契約 (2サム7章)
- ⑧王国の崩壊 (2列25章)

(2) 前回はイザヤ書53章を取り上げた。

- ①「王なるメシア」と「受難のしもべ」という二重のメシア像
 - *ダビデ契約に基づく王的メシア像
 - *イザヤ53章に示される苦難のメシア
- ②旧約時代には、この二つが統合されずに並存していた。
- ③王国崩壊後に示された「希望の中心」。

(3) エレミヤ書の時代背景

- ①南王国ユダの最末期
- ②契約違反による裁きとしてのバビロン捕囚
- ③希望が見えない歴史のどん底
- ④「神の約束は破棄されたのか」という問い

神の約束は必ず成就する。

新しい契約を確認するとそれが分かる。

I. 「新しい契約」の宣言

1. 31節

Jer 31:31 見よ。その日が来る。——【主】の御告げ——その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。

(1) 新しい契約は、モーセ契約の更新ではない。

- ①これは質的に新しい契約である。

②希望が見えないどん底の状態に光をもたらす契約である。

(2) 神がこの契約を結ぶ相手は、「イスラエルの家とユダの家」である。

①置換神学では、神が教会と新しい契約を結ばれたとされる。

②教会=霊的イスラエル

③イスラエルの家とユダの家=教会

④字義どおりに解釈すれば、新しい契約はイスラエルと結んだものである。

⑤教会はその祝福に与っている。

2. 32節

Jer 31:32 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。——【主】の御告げ——

(1) 「エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約」

①これはシナイ契約のことである。

②シナイ契約は古い契約である。

③旧約と新約という対比は、シナイ契約と新しい契約の対比である。

(2) 古い契約との違い

①古い契約は、条件付き契約である。

*イスラエルはその契約を破ってしまった。

②新しい契約は、無条件契約である。

*イスラエルの違反があってもその契約は破棄されない。

3. 33節

Jer 31:33 彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。——【主】の御告げ——わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

(1) 「彼らの時代の後に」

①終末論的表現

②捕囚後のみならず、メシア的時代を指し示す用語である。

③視点は「将来の神の決定的介入」である。

(2) 「わたしが…結ぶ契約」

①主語は一貫して「わたし(ヤハウエ)」である。

②人間側の条件は提示されていない。

③これは無条件契約的構造であり、シナイ契約とは明確に区別される。

(3)「わたしの律法を彼らの中に置き」

①単なる掟の集合ではなく、神の御心そのものである。

②「中に置く」は、外側からの命令→内側の原理への転換を意味する。

(4)「心にそれを書きしるす」

①「心」=人格・意志・判断の中心

②石の板(出31章)との明確な対比がある。

③内的変革(regeneration)を前提としている。

④単なる倫理改善ではなく、新しい霊的本性の付与を示唆している。

(5)「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」

①これは、契約の公式(covenant formula)である。

②新しい契約は、旧約的契約関係の破棄ではなく完成である。

4. 34節

Jer 31:34 そのようにして、人々はもはや、『【主】を知れ』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。——【主】の御告げ——わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」

(1)「【主】を知れ」と教える必要がない。

①「知る」=人格的・关系的認識

②知識の量ではなく、関係の質を意味する。

③祭司制度・仲介者制度を経由しなくても、直接的な神認識が可能になる。

(2)「みな、…わたしを知る」

①階級・性別・年齢の区別なし

②救済の普遍化ではなく、契約の民内部での完全な霊的共有。

③イスラエル全体の将来的回復を含意している。

(3)「咎を赦し、…罪を二度と思い出さない」

①新しい契約の最終的基礎である。

②赦しが先行し、内的変革が保証される。

③「忘れる」=神の健忘ではない。

④裁きの対象として取り扱わないという法的宣言である。

⑤旧約の贖罪制度では達成できなかった次元である。

5. 新しい契約の三本柱

- (1) 内的律法(再生)
- (2) 直接的な神認識(関係の回復)
- (3) 完全な罪の赦し(法的義認)

6. まだ成就していない部分

- (1) イスラエル民族全体の霊的再生(未成就)
- (2) イスラエル全体への律法の内在化(未成就)
- (3) イスラエルの完全な罪の赦し(未成就)
- (4) 新しい契約に基づくメシア王国の完成(未成就)
- (5) 新しい契約の未成就部分は、終末論が必須である理由そのもの。

結論：今日の信者への適用

1. 信仰とは「外から守る努力」ではなく「内から生きる力」である

- (1) 旧い契約のもとでは、神の御心は「外側」にあった。
 - ①人はそれを守ろうとして失敗を重ねてきた。
- (2) 新しい契約のもとでは、神の御心は「内側」にある。
 - ①神ご自身が人の内側に働き、従順の原理を与えてくださる。
- (3) 「頑張る生活」ではなく、「新しいいのちに従って生きる生活」。

2. 神との関係は「制度」ではなく「人格的交わり」に基づいている

- (1) 信仰は、形式や制度の問題ではない。
- (2) クリスチャンとは、人格的に神と結ばれている者である。

3. 罪の赦しは「感情的安心」ではなく「法的確定」である。

- (1) 「罪を二度と思い出さない」という宣言は、このことを保証している。
- (2) 私たちは、すでに赦された者として、感謝と確信をもって生きる存在。

4. 教会は「イスラエルの代替」ではなく「恵みに与る者」である。

- (1) 教会は、イスラエルに取って代わったのではない。
- (2) その霊的祝福に、恵みによって参与している存在である。
- (3) クリスチャンの使命は、希望の終末論の証人となることである。

*次回はダニエル書7章

創造から新天新地へ—24章でたどる神の救済史

11章 「終末の王国」

ダニエル書7章

1. はじめに

(1) これまでの流れ

- ①創造 (創1章)
- ②墮落 (創3章)
- ③アブラハム契約 (創12章)
- ④出エジプト (出12章)
- ⑤荒野での律法付与 (出20章)
- ⑥約束の地の征服 (ヨシ1章)
- ⑦ダビデ契約 (2サム7章)
- ⑧王国の崩壊 (2列25章)
- ⑨受難のしもべの預言 (イザ53章)

(2) 前はエレミヤ書31章を取り上げた。

- ①南王国ユダの最末期
- ②契約違反による裁きとしてのバビロン捕囚
- ③希望が見えない歴史のどん底
- ④「新しい契約」の宣言

(3) 今回は、ダニエル書7章を取り上げる。

- ①歴史書ではなく預言的転換点
- ②地上の歴史を天の視点から見る章

神は歴史を支配しておられる。

4つのキーワードを学ぶとそれが分かる。

I. 四つの獣 — 人間の王国の本質 (1~8節)

Dan 7:1 バビロンの王ベルシャツアルの元年に、ダニエルは寝床で、ある夢と、頭に浮かぶ幻を見た。それからその夢を書き記し、事の次第を述べた。

Dan 7:2 ダニエルは言った。「私が夜、幻を見ていると、なんと、天の四方の風が大海をかき立てていた。

Dan 7:3 すると、四頭の大きな獣が海から上がって来た。その四頭はそれぞれ異なっていた。

1. 異邦の支配が「獣」として描かれる理由

(1) 神のかたちから逸脱した権力

- ①人間は本来、神のかたちとして理性的・道徳的支配を委ねられていた。
- ②しかし神を離れた支配は、神の性質を反映しなくなった。

(2) 力・暴力・自己神格化

- ①獣は本能で生きる。
- ②同様に、神を認めない王国は、力・恐怖・自己正当化によって支配する。

2. 四つの獣の象徴

(1) 獅子(バビロン)

- ①威厳と力を誇る帝国
- ②ネブカドネツアルの栄華と傲慢を象徴している。

(2) 熊(メド・ペルシア)

- ①片側に偏った支配(ペルシアの主導権)
- ②力による拡張と征服の帝国

(3) 豹(ギリシア)

- ①迅速さと知略
- ②アレクサンドロス大王の急速な征服を思わせる。

(4) 恐ろしい第四の獣(最終的異邦帝国)

- ①小さな角の出現
- ②神に敵対することばと行動
- ③終末的反キリスト像への接続

II. 年を経た方 — 天の法廷と主権者なる神(9~12節)

Dan 7:9 私が見ていると、／やがていくつかの御座が備えられ、／『年を経た方』が座に着かれた。／その衣は雪のように白く、／頭髪は混じりけのない羊の毛のよう。／御座は火の炎、／その車輪は燃える火で、

Dan 7:10 火の流れがこの方の前から出ていた。／幾千もの者がこの方に仕え、／幾万もの者がその前に立っていた。／さばきが始まり、／いくつかの文書が開かれた。

Dan 7:11 そのとき、あの角が大言壮語する声があったので、私は見続けた。すると、その獣は殺され、からだは滅ぼされて、燃える火に投げ込まれた。

Dan 7:12 残りの獣は主権を奪われたが、定まった時期と季節まで、そのいのちは延ばされた。

1. 地上の混乱に対する天上の静けさ

- (1) 地では獣が暴れていますが、天では慌ただしさはない。
 - ①神の支配は動じない。

2. 「年を経た方」の描写

- (1) 永遠性・聖さ・裁きの権威
 - ①白い衣、燃える火、無数の従者
 - ②神は時間にも歴史にも制約されない方である。
- (2) 重要な神学的ポイント
 - ①裁きは感情的反応ではなく、正義に基づく判断である。
- (3) 歴史の最終判断は人間にない。
 - ①どの帝国も、自らを永遠とはできない。
- (4) 神はすでに法廷を開いておられる。
 - ①終末は突然始まるのではなく、すでに神の計画の中で進行中である。

III. 人の子 — 真の王国の到来 (13~14節)

Dan 7:13 私がまた、夜の幻を見てみると、／見よ、人の子のような方が／天の雲とともに来られた。／その方は『年を経た方』のもとに進み、／その前に導かれた。

Dan 7:14 この方に、主権と栄誉と国が与えられ、／諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、／この方に仕えることになった。／その主権は永遠の主権で、／過ぎ去ることがなく、／その国は滅びることがない。

1. 「人の子」の意味

- (1) 単なる人間ではない。
 - ①雲に乗って来られる存在である。
- (2) 神から権威を委ねられた存在
 - ①主権は奪うものではなく、与えられるものである。
- (3) 支配の特徴
 - ①永遠の国
 - ②滅びない支配

③全民族的王権

2. メシア預言としての重要性

(1) 後の福音書理解への橋渡し

①後にイエスがご自身を指して用いられる「人の子」という称号の背景。

IV. 聖徒たち — 王国を受け継ぐ者 (16~18節)

Dan 7:16 私は、傍らに立っていた者たちの一人に近づき、このことすべてについて、彼に願って確かめようとした。すると彼は私に答えて、そのことの意味を告げてくれた。

Dan 7:17 『これら四頭の大きな獣は、地から起こる四人の王である。』

Dan 7:18 しかし、いと高き方の聖徒たちが国を受け継ぎ、その国を永遠に、世々限りなく保つ。』

1. 驚くべき逆転

(1) 歴史の主役は獣では終わらない。

2. 獣の支配 → 聖徒の支配

(1) 神の国は委ねられる国である。

(2) 聖徒とは誰か

①イスラエルの残れる者

②メシアに属する者たち

3. 王国神学の核心

(1) ダニ 7章と黙示録の連続性

(2) 地上の王国の終焉と神の王国の完成

(3) 新天新地への流れ

(4) 一時的支配 → 永遠の支配

(5) 混乱 → 義と平和

結論：今日の信者への適用

1. 自分は「どの王国に属して生きているのか」を自覚する。

(1) 世界には二つの支配原理が並行して存在している。

- (2) 地上の王国：力・恐怖・自己正当化によって支配する「獣の王国」
- (3) 天から与えられる王国：神の主権と正義に基づく「人の子の王国」
- (4) 自分はどの王国で生きているか。これが信仰生活の出発点である。

2. 目に見える権力や時代の動きに過度に振り回されない。

- (1) ダニエル書7章では、地上では獣が暴れている。
- (2) しかし天では、すでに法廷が開かれ、裁きが進行している。
- (3) 神の主権は一度も揺らいでいない。

3. 力によらず、忠実さによって生きる。

- (1) 王国を受け継ぐのは、「いと高き方の聖徒たち」である。
- (2) 彼らの特徴は、神に属し続けたことである。
- (3) 社会の中で少数派であっても、神の王国は彼らに委ねられる。

4. 新天新地を見据えて、希望をもって忍耐する。

- (1) ダニ7章は、新天新地への直接的描写ではない。
- (2) しかし、そこへ至る決定的な転換点を示している。
- (3) 神の国というゴールを知っているからこそ、希望をもって今を生きる。

創造から新天新地へ—24章でたどる神の救済史

12章 「帰還の命令」

歴代誌第二 36章

1. はじめに

(1) これまでの流れ

- ①創造 (創 1章)
- ②墮落 (創 3章)
- ③アブラハム 契約 (創 12章)
- ④出エジプト (出 12章)
- ⑤荒野での律法付与 (出 20章)
- ⑥約束の地の征服 (ヨシ 1章)
- ⑦ダビデ契約 (2サム 7章)
- ⑧王国の崩壊 (2列 25章)
- ⑨受難のしもべの預言 (イザ 53章)
- ⑩新しい契約 (エレ 31章)
- ⑪終末の王国 (ダニ 7章)

(2) 今回は 2歴 36章を取り上げる。

① ヘブル語聖書 (タナハ) の配列

*律法 (トーラー) —預言者 (ネビイーム) —諸書 (ケトゥビーム)

- ②その最後が「歴代誌第二 36章」であることは偶然ではない。
- ③キリスト教旧約 (マラキ) と、ユダヤ正典の終わりは異なる。
- ④重要な問い

*なぜイスラエルの歴史は「滅亡」ではなく「帰還の命令」で終わるのか。

*なぜ裁きの書が、希望のことばで閉じられているのか。

旧約聖書で啓示された神の約束は、新約聖書に引き継がれる。

2歴 36章の要点は、そのことを教えている。

I. 王たちの霊的墮落 (1~16節)

1. 連続する不従順

(1) ヨシヤ以後の王たちは、例外なく【主】の目に悪を行った。

- ①エホアハズ
- ②エホヤキム
- ③エホヤキン
- ④ゼデキヤ

(2) 指導者・祭司・民が一体となって墮落していく。

①14節

2Ch 36:14 そのうえ、祭司長全員と民も、異邦の民の忌み嫌うべきすべての慣わしをまねて、不信に不信を重ね、主がエルサレムで聖別された【主】の宮を汚した。

2. 神の忍耐と拒絶

(1) 預言者の派遣

①【主】は「早くから、たびたび」預言者を遣わされた。

②しかし民は、神の使者を嘲り、みことばを軽んじ、預言者を侮った。

(2) 裁きは突然ではなく、拒み続けた結果であることが強調される。

①16節

2Ch 36:16 ところが、彼らは神の使者たちを侮り、そのみことばを蔑み、その預言者たちを笑いものにしたので、ついに【主】の激しい憤りが民に対して燃え上がり、もはや癒やされることのないまでになった。

II. 神殿崩壊と捕囚(17~21節)

1. 神殿の破壊という神学的衝撃

(1) 神の臨在の象徴である神殿が焼かれる。

①19節

2Ch 36:19 神の宮は焼かれ、エルサレムの城壁は打ち壊され、その高殿はすべて火で焼かれ、その中の宝としていた器も一つ残らず破壊された。

(2) これは単なる国家滅亡ではなく、契約破棄の結果である。

①シナイ契約破棄

②土地の契約とダビデ契約は依然として有効。

2. 安息年の回復

(1) 捕囚の70年は、「地が安息を取り戻すため」(21節)。

①レビ記26章の契約上の呪いの成就

②21節

2Ch 36:21 これは、エレミヤによって告げられた【主】のことばが成就して、この地が安息を取り戻すためであった。その荒廃の全期間が七十年を満たすまで、この地は安息を得た。

(2) 歴史は偶然ではなく、契約の枠組みの中で進行している。

- ①490年÷7年=70年
- ②王国時代の総年数であるが、象徴的数字でもある。
- ③バビロン捕囚は70年で終わる。

III. 歴史の転換点 (22~23節)

1. 異邦の王を用いる【主】

(1) 22~23節

2Ch 36:22 ペルシアの王キュロスの第一年に、エレミヤによって告げられた【主】のことが成就するために、【主】はペルシアの王キュロスの霊を奮い立たせた。王は王国中に通達を出し、また文書にもした。

2Ch 36:23 「ペルシアの王キュロスは言う。『天の神、【主】は、地のすべての王国を私にお与えくださった。この方が、ユダにあるエルサレムに、ご自分のために宮を建てるよう私を任命された。あなたがた、だれでも主の民に属する者には、その神、【主】がともにいてくださるよう。その者は上って行くようにせよ。』」

(2) バビロンではなく、ペルシア王キュロスが登場する。

- ①彼は【主】によって「奮い立たされた」と記される。
- ②解放命令の内容
 - *エルサレムに上れ。
 - *神殿を再建せよ。
 - *【主】がともにいてくださるよう。

2. ここで物語は「終わり」ではなく、「始まり」で終わる。

- (1) 旧約聖書と新約聖書を分断してはならない。
 - ①聖書を読む際には、歴史的背景と文脈を考慮に入れる。

IV. 新約聖書への橋渡し

1. 「帰れ」という命令の未完了性

- (1) 神殿は再建された。
 - ①ゼルバベルによる建設。これが第二神殿である。
 - ②しかし、栄光は完全には戻らない。
 - ③ヘロデ大王による拡張は物理的なもの。

(2) ダビデの王座も回復していない。

2. 第二神殿期の期待

(1) 民は待ち続ける。

- ①メシア
- ②栄光の回復
- ③真の解放

3. 新約の冒頭との連結

(1) マタ1章は「ダビデの子、アブラハムの子」から始まる。

①歴代誌が閉じた問いに、新約が答え始める。

(2) キュロスの命令は、キリストによる真の解放の影である。

結論：今日の信者への適用

1. 神の裁きは、突然ではなく、拒み続けた結果として来る。

- (1) 私たちの時代も同じである。
- (2) 聖書の警告、良心の声、歴史の教訓がある。
- (3) 神は忍耐深い方であるが、今の状態が永続することはない。

2. 神殿は壊れても、神のご計画は壊れない。

- (1) 神殿の崩壊は、「神の臨在の終わり」に見えた。
- (2) 神が敗北したのではなく、神が主権をもって裁かれたのである。
- (3) 教会の衰退や社会の価値観の混乱は、神の敗北ではない。
- (4) むしろ、神が新しい段階へ導かれる前兆である場合がある。

3. 神は、異邦人・世俗権力すら用いて御心を成し遂げられる。

(1) 神は、異邦の指導者、世俗の出来事をも用いて、救済史を前進させる。

4. 真の回復は、地理的帰還では完成しない。

- (1) 捕囚からの帰還は実現したが、栄光は不完全であった。
- (2) 環境、制度、組織だけでは、人は本当に回復しない。
- (3) バビロン(世)から神の召しに応答して立ち上がるかが問われている。

5. 旧約は「未完」で終わり、新約がその答えを示す。

- (1) 歴代誌は、「次を待て」という終わり方をしている。
- (2) 私たちはすでにメシアを知っているが、完成はまだ先にある。
- (3) このシリーズは救われただけで満足している人たちへの挑戦である。

創造から新天新地へ—24章でたどる神の救済史

13章 「約束の系譜に現れた救い主」

マタイの福音書1章

1. はじめに

(1) これまでの流れ

①旧約聖書の最後の章として、2歴36章を取り上げた。

*ヘブル語聖書(タナハ)の配列

*律法(トーラー)—預言者(ネビイーム)—諸書(ケトゥビーム)

②その最後が「歴代誌第二36章」であることは偶然ではない。

③キリスト教旧約(マラキ書)と、ユダヤ正典の終わりは異なる。

(2) 2つの重要な問い

①なぜイスラエルの歴史は「滅亡」ではなく「帰還の命令」で終わるのか。

②なぜ裁きの書が、希望のことばで閉じられているのか。

(3) マタイの福音書の役割

①新約聖書の冒頭に位置し、旧約の約束がイエスにおいて成就したことを示す。

②その最初に置かれているのが系図である。

③現代の読者には退屈に見えがちである。

*救済史の流れに関する無知

*アブラハム契約、ダビデ契約、新しい契約に関する無知

④ユダヤ人読者にとっては極めて神学的・契約的意味を持つ宣言である。

⑤系図を通して、「イエスとは誰か」という問いに、明確な答えを与えている。

命題：系図はイエスが約束のメシアであることを教えている。

系図を3分割すればそれが分かる。

I. アブラハムの子孫—約束の相続者(1、2~6a節)

1. 2歴36:23

2Ch 36:23 「ペルシアの王キュロスは言う。『天の神、【主】は、地のすべての王国を私にお与えくださった。この方が、ユダにあるエルサレムに、ご自分のために宮を建てるよう私を任命された。あなたがた、だれでも主の民に属する者には、その神、【主】がともにいてくださるように。その者は上って行くようにせよ。』」

2. 1節

Mat 1:1 アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。

3. イエスは、祝福の契約を受け継ぐ方である。

(1) アブラハム契約の条項

- ①子孫
- ②土地
- ③諸国の民への祝福

(2) イエスは、肉系的譜において正当にアブラハムの子孫である。

- ①その祝福は民族イスラエルにとどまらず、全世界に及ぶ。
- ②「新しい信仰の創始者」ではなく、旧約の約束を相続し完成させる方。
- ③救いは偶発的出来事ではなく、契約に基づく歴史的計画である。

II. ダビデの子孫 — 王なるメシア (1: 6b~11)

1. 6節

Mat 1:6 エッサイがダビデ王を生んだ。／ダビデがウリヤの妻によってソロモンを生み、

2. イエスは、王権を持つ正当なメシアである。

(1) ダビデ契約の条項

- ①王位
- ②王国
- ③王座の永続性

(2) マタイはダビデを系図の中心に据える。

- ①さらに「ダビデ王」と明記する。

3. バビロン捕囚という断絶の歴史

(1) 神の王権の約束は無効になっていない。

- ①系譜は静かに保たれていた

(2) イエスは政治的革命家ではなく、神の時に即して現れた王である。

- ①メシアの王権は、歴史を超えて保持されている。

III. すべての人の救い主 (1: 3~6, 16)

1. 不自然な4人の名前

(1) 異邦人・罪・破れを想起させる人物

- ①タマル
- ②ラハブ
- ③ルツ
- ④ウリヤの妻(バテ・シェバ)

(2) 意図的な神学的メッセージ

- ①イエスの到来は、義人たちへの報酬ではない。
- ②それは、罪と破れの現実の中に差し込む救いである。
- ③イエスは、ユダヤ人だけでなく、すべての人の救い主である。

2. 16節

Mat 1:16 ヤコブがマリアの夫ヨセフを生んだ。キリストと呼ばれるイエスは、このマリアからお生まれになった。

- (1) 「ヨセフから生まれた」ではなく、「マリアから生まれたイエス」
 - ①処女懐胎による神の介入が強調される。

結論：今日の信者への適用

- 1. 私たちは「物語の途中」に生きていることを自覚する。
 - (1) 本章の系図は、神の救済史が継続していることを証している。
 - (2) 滅亡、沈黙の400年を経ても、神の計画は静かに前進していた。
 - (3) 今日の私たちも、神の大きな物語の中の一コマを生きている。
 - (4) 見える現実ではなく、神の計画の確かさに立って歩もう。
- 2. 神は不完全な人間を用いて、ご自身の約束を成就される。
 - (1) マタイの系図には、不完全な人々が含まれている。
 - (2) 神は「恵みに委ねる人」を用いられる。
 - (3) 私たちに、そのような信仰はあるか。
- 3. 王なるキリストに従うとは、主権を明け渡すことである。
 - (1) イエスは救い主であると同時に、王である。
 - (2) 助けが欲しい時だけ頼るのではなく、人生の主導権を委ねる。
 - (3) マタイは最初から、「この方は王である」と宣言している。
- 4. 「祝福を受ける者」から「祝福を運ぶ者」へと召されている。
 - (1) その祝福は、教会を通して広がるよう委ねられている。
 - (2) 教会は避難所である前に、派遣基地である。

マタイ1章の系図は、過去の記録ではありません。
それは、神が約束を忘れず、歴史を導き、
今もなお私たちをその救済史の中に生かしておられるという証しです。
今回は、ヨハネの福音書1章を取り上げます。

創造から新天新地へ—24章でたどる神の救済史

14章 「初めにことばがあった」

ヨハネの福音書1章

1. はじめに

(1) これまでの流れ

- ①マタイの福音書は、旧約の約束がイエスにおいて成就したことを示す。
- ②その最初に置かれているのが系図である。
- ③現代の読者には退屈に見えがちである。
 - *救済史の流れに関する無知が存在する。
 - *アブラハム契約、ダビデ契約、新しい契約に関する無知が存在する。
- ④系図の内容は、ユダヤ人にとって、神学的・契約的意味を持つ宣言である。

(2) ヨハネの福音書の特徴

- ①「地から天を見上げる」共観福音書とは異なる。
- ②「天から地を見下ろす」視点で書かれている。
- ③キリストの出来事の背後にある霊的意味が啓示されている。

(3) ヨハ1:1~18のキアズム構造

- A 永遠のロゴス (1~2)
- B 創造主 (3)
- C 光と闇 (4~5)
- D 証言 (6~8)
- C' 拒絶と受容 (9~13)
- B' 受肉 (14)
- A' 神の完全啓示 (15~18)

永遠の神が、私たちが新しく造るために来られた。

「まえがき」に見られるキアズム構造の内容がそれを示している。

I. A 永遠のロゴス (1~2節)

Joh 1:1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

Joh 1:2 この方は、初めに神とともにおられた。

1. 「初めより前におられたお方」

- (1) 「初めに」 = 創1:1以前

(2) ことば=ロゴス(メムラ)=神の自己表現

①ことばは、神と区別されつつ神である。

②三位一体の神の啓示が見られる。

2. 神学的意味

(1) 創造以前の永遠性が示される。

①ことばは永遠に存在しておられる。

(2) 新創造の起点が示される。

①すでに存在するものの改良ではない。

②創世記1章に対抗する新しい創造である。

*光が創造された。

*光そのものが来られた。

II. B 創造主なるロゴス — 万物の源 (3節)

Joh 1:3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。

1. すべてを造られたお方

(1) 一切の存在はこの方による。

①この方は、創造主であって被造物ではない。

②三位一体による創造がなされた。

(2) 創造の栄光が示唆されている。

①ここに再創造(救い)への伏線が張られている。

III. C 光と闇 — いのちの勝利 (4~5節)

Joh 1:4 この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。

Joh 1:5 光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。

1. 闇に打ち勝つ光

(1) いのち=神のいのち(ζωή)

①このいのちが人の光となる。

(2) 光と闇の対比

①闇は光に打ち勝たなかった

②十字架に至る霊的戦いの予告

③終末的勝利の予告

IV. D 証言 — 光を指し示す声 (6~8節)

Joh 1:6 神から遣わされた一人の人が現れた。その名はヨハネであった。

Joh 1:7 この人は証しのために来た。光について証しするためであり、彼によってすべての人が信じるためであった。

Joh 1:8 彼は光ではなかった。ただ光について証しするために来たのである。

1. 「光ではなく、光を証しする者」
 - (1) 神から遣わされた人ヨハネ
 - ①彼の使命は証言することである。
 - ②奉仕者のモデル
 - (2) 神は証言を通して働かれる。
 - ①信仰は証しから生まれる。

V. C' 拒絶と受容 — 光への応答 (9~13節)

Joh 1:9 すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた。

Joh 1:10 この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。

Joh 1:11 この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。

Joh 1:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。

Joh 1:13 この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。

1. 不信仰と信仰の対比
 - (1) 「受け入れなかった世と、受け入れた者たち」
 - (2) まことの光が世に来た。
 - ①世は知らなかった。
 - ②イスラエルも拒否した。
 - ③しかし、信じた者は神の子とされた。
2. 新生は神による。
 - (1) 証言は人間の役割である。
 - (2) 再創造は神のわざである。

VI. B' 受肉 — 幕屋を張られた栄光 (14節)

Joh 1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

1. 「神が人となられた」
 - (1) ことばは肉となった。
 - ① シャカイナグローリーの帰還
 - ② エデン → 幕屋 → 神殿 → キリスト
 - ③ 新天新地 (新しいエルサレム) への接続
 - (2) 「住まわれた」 = 幕屋を張られた。
 - ① シャカイナグローリーの帰還
 - ② エデン → 幕屋 → 神殿 → キリスト
 - ③ 新天新地 (新しいエルサレム) への接続

VII. A' 神の完全啓示 — 父を解き明かす御子 (15~18節)

Joh 1:15 ヨハネはこの方について証して、こう叫んだ。「『私の後に来られる方は、私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のことです。」

Joh 1:16 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた。

Joh 1:17 律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。

Joh 1:18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。

1. 「神を解き明かすひとり子の神」
 - (1) ヨハネの証言による永遠性の再確認
 - ① 恵みの上にさらに恵み
 - ② 律法と新しい契約の対比
 - (2) 「説き明かされた」
 - ① 神の最終啓示が与えられる。
 - ② 新天新地に至る啓示の完成が予告される。

結論：今日の信者への適用

- (1) 見るべき方：ニュースではなくロゴス
 - ① 情報の洪水の中で「初めに」へ立ち返る。
 - ② 人類が抱える問題は今も変わらない。

(2) 立つべき場所：闇ではなく光の中

- ①光と闇の戦いは、最終的に十字架と復活において決着している。
- ②闇を力でねじ伏せるのではなく、光の側に立ち続けるよう招かれている。
- ③「闇はこれに打ち勝たなかった」という宣言を信仰告白とする。

(3) 果たすべき役割：結果ではなく証言

- ①奉仕者は「目立つ人」ではなく、「キリストを見えるようにする人」である。
- ②伝道の結果は主に委ねる。

(4) 生きるべき身分：神の子ども

- ①自分の価値を成果で測らない。
- ②「子として受け入れられている」という福音の身分から一日を始めよう。

(5) 目指す終着点：新天新地の完成

- ①受肉は、終末の完成（新しいエルサレム）へ続く「臨在の回復」の始点。
- ②信者は、完成を待つ者として、今を整える。
- ③「最後は栄光で終わる」という確信が、今日の恐れと疲れを小さくする。

創造から新天新地へ—24章でたどる神の救済史

15章 「メシアによる律法解釈と御国の義」

マタイの福音書5章

1. はじめに

(1) これまでの流れ

- ①マタイの福音書は、旧約の約束がイエスにおいて成就したことを示す。
 - * その最初に置かれているのが系図である。
 - * 系図は、神学的・契約的意味を持つ宣言である。
- ②ヨハネの福音書は、キリストの出来事の背後にある霊的意味を啓示する。
 - * 永遠の神が、私たちが新しく造るために来られた。
 - * 神の国の市民となるための再創造である。

(2) マタイの福音書5章

- ①マタイは意図的にイエスを「新しいモーセ」として描いている。
 - * 山に登り、座り、律法を語る(1節)。
- ②イエスはメシアとしてモーセの律法の意味を解き明かす。
- ③と同時に、「御国の完成形の倫理」を提示する。

(3) 救済史の文脈

- ①創造 → 墮落 → 律法 → メシア → 教会 → 王国 → 新天新地
- ②マタ5章は、創造の回復を示し、律法の真意を明らかにし、御国の完成を指し示す。
- ③私たちはその「はざま」に生きている。
- ④すでに義とされ、まだ完成していない。

私たちは、神の国の市民とされている。

この箇所は、神の国の市民の8つの特徴とその使命を教えている。

I. 8つの特徴

1. 前半：神との関係(3~6節)

Mat 5:3 「心の貧しい者は幸いです。／天の御国はその人たちのものだからです。

Mat 5:4 悲しむ者は幸いです。／その人たちは慰められるからです。

Mat 5:5 柔和な者は幸いです。／その人たちは地を受け継ぐからです。

Mat 5:6 義に飢え渴く者は幸いです。／その人たちは満ち足りるからです。

(1) 心の貧しい者

- ①自己義を捨て、「神の義」により頼む者

(2) 悲しむ者

①罪に対して心を痛める者

(3) 柔和な者

①神への揺るぎない信頼を持つ者

(4) 義に飢え渴く者

①律法に示された神の義を求める者

2. 後半：人との関係（7～12節）

Mat 5:7 あわれみ深い者は幸いです。／その人たちはあわれみを受けるからです。

Mat 5:8 心のきよい者は幸いです。／その人たちは神を見るからです。

Mat 5:9 平和をつくる者は幸いです。／その人たちは神の子どもと呼ばれるからです。

Mat 5:10 義のために迫害されている者は幸いです。／天の御国はその人たちのものだからです。

Mat 5:11 わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。

Mat 5:12 喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです。

(5) あわれみ深い者

①他者の痛みに応答する者

(6) 心のきよい者

①動機まで清い者

(7) 平和をつくる者

①信者同士の和解を求める者

(8) 義のために迫害される者

①迫害は神に従っている証拠（2テモ3:12）

3. 8つの祝福は「神の義を手に入れた人」の姿を示している。

II. 信者の使命 — 塩と光（13～16節）

Mat 5:13 あなたがたは地の塩です。もし塩が塩気をなくしたら、何によって塩気をつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけです。

Mat 5:14 あなたがたは世の光です。山の上にある町は隠れることができません。

Mat 5:15 また、明かりをともして升の下に置いたりはしません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいるすべての人を照らします。

Mat 5:16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです。

1. 内面の特徴が外面に現れる。

(1) 地の塩

- ①味をつける。
- ②腐敗を防ぐ。

(2) 世の光

- ①世の人に道を示す。
- ②神の栄光を示す。

2. 信者の義は、内面にとどまらない。

(1) それは社会に対して証しとなる。

3. パリサイ人にまさる義 (20 節)

Mat 5:20 わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていないければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。

(1) なんでないか。

- ①民族的義ではない。
- ②外面的律法遵守でもない。

(2) なんであるか。

- ①メシアを信じる信仰によって与えられる義
- ②ここに福音の核心がある。

4. 完全を目指して (48 節)

Mat 5:48 ですから、あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい。

(1) この命令は達成可能か。

- ①人間の努力では到達不能
- ②神の義は信仰によって与えられる。

- ③聖霊が内住し、律法を心に書いてくださる。
- ④神の助けは、手を伸ばせば届くところにある。

結論：今日の信者への適用

1. 「再創造された者」として生きているか。
 - (1) 創造において人は神のかたちに造られた。
 - (2) 墮落によって、そのかたちは歪んだ。
 - (3) 8つの幸いは、再創造された人間の姿である。

2. 「御国の前味」を生きているか。
 - (1) 山上の説教は、将来の御国の倫理である。
 - (2) 私たちの人生は、この世で完結しない。
 - (3) 地上の評価よりも天の評価を重視すべきである。

3. 塩と光として機能しているか。
 - (1) 内面の義は、必ず外面に現れる。
 - (2) 今日の社会は道徳的相対主義と霊的混乱の中にある。
 - (3) 神を指し示す生活を心がけるべきである。

4. 「パリサイ人の義」に戻っていないか。
 - (1) 信者の義とは、メシアを信じる信仰によって与えられる義である。
 - (2) 「完全でありなさい」という命令は、将来の栄化を見据えた召命である。
 - (3) 聖霊の内住を前提とした命令である。
 - (4) あなたが立っている義は、あなたを完成へと導いているか。

創造から新天新地へ—24章でたどる神の救済史
16章 「新しく生まれなければ—新創造の始まり」
ヨハネの福音書3章

1. はじめに

(1) これまでの流れ

- ①創造 — 神は良き世界を造られた。
- ②墮落 — 罪により死が侵入してきた。
- ③契約の歴史 — 神は救済計画を展開された。
- ④メシア到来 — 約束が成就した。
- ⑤山上の垂訓 — 御国の義が提示された。

(2) 新たな疑問

- ①どうすれば人は御国に入れるのか。
- ②その問いに答えるのがヨハ3章である。
- ③ヨハ3章のテーマは、「改革」ではなく「再創造」である。

(3) 創世記1章との対比

①創造の御霊(創1:2)

Gen 1:2 地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上であり、神の霊がその水の面を動いていた。

②いのちを与える息(創2:7)

Gen 2:7 神である【主】は、その大地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。

御国に入るための条件は「再創造」である。

ヨハ3章を3つに区分して学ぶ。

I. 第一区分：新しく生まれなければならない(1~8節)

1. ニコデモという人物

(1) 「夜、イエスのもとに来た」

- ①この訪問を知られたくない。

(2) イスラエル社会の成功者

- ①パリサイ人
- ②サンヘドリンの議員
- ③イスラエルの教師

④宗教的成功者でも足りない。

2. イエスの教え (3節)

Joh 3:3 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに言います。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

(1) 「新しく生まれる」 (ἀνωθεν)

- ①「上から生まれる」という訳も可能である。
- ②人間的努力では不可能である。
- ③神的起源のいのちが暗示されている。

(2) 「水と御霊によって」 (5節)

- ①肉体的誕生
- ②霊的誕生

(3) エゼ 36:25~27

Eze 36:25 わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよくなる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、

Eze 36:26 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。

Eze 36:27 わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守り行うようにする。

- ①「新しい心・新しい霊」の約束がイエスにあって成就する。
- ②創造と再創造の連続性が見られる。

II. 第二区分：上げられる人の子 (9~15節)

1. 理解できない教師

(1) 「あなたはイスラエルの教師でありながら…」

- ①旧約は新生を予告していた。

2. 青銅の蛇 (民 21章)

(1) 救いの型 (14~15節)

Joh 3:14 モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。

Joh 3:15 それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」

- ①罪の結果：死
- ②神の備え：見上げる信仰
- ③条件：見るだけ

- (2) 「上げられなければならない」
 - ①十字架(恥の道が栄光の道)
 - ②復活(十字架の正当性の証明)
 - ③昇天(メシアの高揚の完成)

(3) 御子の高揚は、新創造の基礎である。

III. 第三区分: ヨハネによる福音の要約(16~17節)

1. 16節

Joh 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(1) イエスのことばであっても、ヨハネのことばであっても、結論は同じ。

- ①この聖句は、福音の本質を簡潔に、的確に伝えている。
- ②すべての単語が、重要な意味を持っている。

(2) 主語は「神」である。

- ①イエスの受肉は、神の愛から出たものである。
- ②イエスの十字架の死(14節)は、神の愛から出たものである。
- ③神は愛である。
- ④神の愛は、最善を与えるほどに深く、強く、真実なものである。
- ⑤「ひとり子」とは、比類なき子、置き換えがきかない子である。

(3) 神の愛の対象は「世」である。

- ①ユダヤ人たちは、神はイスラエルの子たちを愛していると信じていた。
- ②しかし神は、すべての人を愛しておられる。
- ③「世」とは、罪を宿した人間のことである。

(4) 神が犠牲を払う目的は「永遠のいのち」を与えるためである。

- ①神は、罪人が救われることを喜ばれる(エゼ18:23)。

Eze 18:23 わたしは悪しき者の死を喜ぶだろうか——【神】である主のことば——。彼がその生き方から立ち返って生きることを喜ばないだろうか。

- ②神は、罪人が滅びを免れるように、救いの道を用意された。
- ③イエス・キリストを信じるかどうかで、道が分かれる。
- ④神の愛を拒否する者は、滅びる。

*滅びとは、存在しなくなることではない。

*滅びとは、神との関係が断たれ、神の怒りがとどまる状態である。

⑤神の愛を受け入れる者は、永遠のいのちを受ける。

*神の愛を受け入れた者は、新生した人である(5節)。

*新生した人は、救いを失うことがない。

⑥永遠のいのちには、2つの側面がある。

*永遠に生きるという時間的側面

*神との平和を持つという質的側面

2. 17節

Joh 3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

(1) 神は、御子を遣わすことなく、世をさばくこともできた。

①しかし、そうはしないで、御子を世に遣わされた。

(2) 神が御子を世に遣わされた目的

①世(罪人)を裁くためではない。

②御子によって世が救われるためである。

③御子は、究極的には世を裁かれるが、それは受肉の目的ではない。

今日の信者への適用

1. 私たちはすでに「新創造」に属している(存在の確信)

(1) 私たちは「宗教を持った人」ではない。

(2) 「努力して良くなろうとしている人」でもない。

(3) 「上から生まれた者」である。

(4) 「最初のアダム」ではなく、「最後のアダム」に属する者である。

(5) 信者はすでに「再創造」に入れられた者である。

2. 新創造は、今ここで始まっている(永遠のいのちの現在性)

(1) 永遠のいのちの二側面

①時間的側面(永遠に生きる)

②質的側面(神との交わり)

(2) 永遠のいのちは「死後の保証」だけではない。

①今日、神との平和を持って歩むこと。

②祈りは義務ではなく、新創造の呼吸である。

③新創造においては、御霊が私たちの内に住まわれる。

3. 「見るだけ」で救われたことを忘れない(恵みの原理)
 - (1) 青銅の蛇の型は、信者に対しても語りかける。
 - (2) 私たちは「努力して」救われたのではない。
 - (3) 見上げただけで救われた。
 - (4) 信仰生活は、「十字架を見続ける生活」である。

4. 光の中を歩む(悔い改めを隠さない)
 - (1) 新生した者は闇に居続けられない。
 - (2) 罪の隠蔽は新創造の呼吸を止める。
 - (3) 告白と悔い改めは敗北ではなく、光に來たしるしである。

5. 花婿を待つ花嫁として生きる(終末的視点)
 - (1) ヨハ3章後半は、花婿の到来を語る。
 - (2) 救済史の流れ:
 - ①創造 → 契約 → メシア → 十字架 → 教会 → 終末 → 新天新地
 - ②信者は、「花嫁として整えられている存在」である。
 - ③終末的希望が現在の価値観を変える。

創造から新天新地へ—24章でたどる神の救済史

17章 「教会誕生の予告」

マタイの福音書16章

1. はじめに

(1) これまでの流れ

- ①創造 — 神は人を神のかたちに造られた。
- ②墮落 — 罪によって人類は神から離れた。
- ③契約の歴史 — 神はアブラハム契約を通して救済計画を開始された。
- ④イスラエルの使命 — メシアを世に送り出す民として選ばれた。
- ⑤メシア到来 — イエスは約束のメシアとして来られた。
- ⑥御国の提示 — 山上の垂訓によって御国の義が示された。

(2) マタ16章の役割

- ①しかし、ここで大きな問題が生じる。
- ②イスラエルはメシアを受け入れるのか、それとも拒否するのか。
- ③マタ16章は、この問いに対する回答である。
- ④イスラエルの拒否が明らかになり、救済史は新しい段階へと進む。
- ⑤それが教会時代である。

マタ16章は、救済史における「決定的な転換点」である。

この章に登場する3つの宣言がそれを証明している。

I. メシアの正体が告白される(13~16節)

1. 場所

(1) ピリポ・カイサリア地方

- ①イスラエルの地の最北端
- ②ヘロデ・ピリポがカイサルに献上した町
- ③地中海に面したカイサリアと区別するための名称
- ④現代のバニマス

(2) イエスは弟子たちをリトリートへと導かれた。

- ①自分がメシアであることを教えるのが弟子訓練のピークである。

2. 方法(13~16節)

Mat 16:13 さて、ピリポ・カイサリアの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに「人々は人の子をだれだと言っていますか」とお尋ねになった。

Mat 16:14 彼らは言った。「バプテスマのヨハネだと言う人たちも、エリヤだと言う人たちもいます。またほかの人はエレミヤだとか、預言者の一人だとか言っています。」

Mat 16:15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」

Mat 16:16 シモン・ペテロが答えた。「あなたは生ける神の子キリストです。」

(1) イエスの問い

「人々は人の子をだれだと言っていますか。」

①「人の子」はメシアの称号

(2) 弟子たちの答え

①人々はイエスを「偉大な宗教的人物」とは認めていた。

②しかし、メシアだとは理解していなかった。

* バプテスマのヨハネ

* エリヤ

* エレミヤ

* 預言者の一人

(3) イエスの問い

「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」

①傍観者でいることを許さない質問

(4) ペテロの答え

「あなたは生ける神の子キリストです。」

①新約聖書における最も重要な信仰告白の一つ

②イエス＝メシア＝神の子

3. この啓示の源 (17節)

Mat 16:17 すると、イエスは彼に答えられた。「バルヨナ・シモン、あなたは幸いです。このことをあなたに明らかにしたのは血肉ではなく、天におられるわたしの父です。」

(1) 啓示の源は、天の父である。

①この信仰告白は、人間の理解ではなく、神の啓示によるものである。

II. 教会誕生が予告される (18～19節)

1. 聖書の中で初めて「教会 (エクレシア)」ということばが登場する (18節)。

Mat 16:18 そこで、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。

(1) 教会の建設宣言

「わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。」

- ①教会はまだ存在していない。
- ②教会はイエスが建てる。
- ③教会は将来に属する計画である。
- ④教会は旧約時代には存在しなかった新しい共同体である。
- ⑤ユダヤ人と異邦人が一つになる「新しいひとりの人」である。

(2) 岩とは何か

- ①ペテロの信仰告白
- ②教会の土台は、「イエスはキリストである」という信仰告白である。

(3) 教会の勝利の保証

「よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」

- ①ペテロが死んでも教会は存続する。
- ②これは、教会が歴史の中で滅びないことの保証である。
- ③ローマ帝国も、迫害も、異端も教会を滅ぼすことはできない。

2. ペテロの使命 (19節)

Mat 16:19 わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。あなたが地上でつなぐことは天においてもつなぐれ、あなたが地上で解くことは天においても解かれます。」

(1) 天の御国の鍵

- ①ユダヤ人、サマリア人、異邦人を救いに導く役割

(2) 「つないだり、解いたり」する役割

- ①メシアの律法を解釈し、適用する役割

III. 十字架の道が宣言される (21～28節)

1. 受難の予告 (21節)

Mat 16:21 そのときからイエスは、ご自分がエルサレムに行って、長老たち、祭司長たち、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならないことを、弟子たちに示し始められた。

(1) 救いは十字架によって完成する。

- ①十字架は救済史の中心である。

2. ペテロの失敗 (22節)

Mat 16:22 すると、ペテロはイエスをわきにお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません。」

- (1) ペテロはこれを受け入れられない。
 - ①彼は栄光のメシアは理解していた。
 - ②しかし、受難のメシアを理解していなかった。

3. イエスの叱責 (23節)

Mat 16:23 しかし、イエスは振り向いてペテロに言われた。「下がれ、サタン。あなたはわたしをつまずかせるものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

- (1) イエスの応答
 - ①ペテロの考えはサタンから出たものである。

4. 弟子の条件 (24～25節)

Mat 16:24 それからイエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」

Mat 16:25 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者はそれを見出すのです。

- (1) ここで示される原則
 - ①十字架 → 栄光

結論：今日の信者への適用

1. 私は、イエスを正しく告白する信仰を持っているか。
 - (1) 「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」
 - (2) これは、すべての人に向けられている問いである。
 - (3) 人々はイエスを様々に評価する。
 - ①偉大な教師、宗教家、預言者
 - ②しかし、それだけでは不十分である。
 - (4) 「イエスは生ける神の子キリストである」という信仰が必要である。
 - (5) これは、神の啓示によって与えられる確信である。

2. 私は、教会の一員として生きているだろうか。
 - (1) 「わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。」
 - (2) 教会は、キリストご自身が建てておられる共同体である。
 - ①信者の集まり
 - ②キリストのからだ

③神の家族

- (3) 「よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」
- (4) クリスチャンは、教会の一員として忠実に仕えるべきである。

3. 私は、十字架の道を歩む覚悟を持っているだろうか。

- (1) 「自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」
- (2) これは、弟子道の本質を示すことばである。
- (3) ペテロもこの本質を理解できなかった。
- (4) 聖書が示す原則は、十字架 → 栄光である。
- (5) キリストに従う者は、最終的に新天新地の栄光にあずかる。

次回：マタイの福音書 26章

創造から新天新地へ—24章でたどる神の救済史

18章 「新しい契約」

マタイの福音書 26章

はじめに

(1) これまでの流れ

- ①創造 — 神は人を神のかたちに造られた。
- ②墮落 — 罪によって人類は神から離れた。
- ③契約の歴史 — 神はアブラハム契約を通して救済計画を開始された。
- ④イスラエルの使命 — メシアを世に送り出す民として選ばれた。
- ⑤メシア到来 — イエスは約束のメシアとして来られた。
- ⑥御国の提示 — 山上の垂訓によって御国の義が示された。
- ⑦教会時代の予告 — イスラエルの拒否が明らかになる。

(2) マタ 26章の役割

- ①イエスは、過越の子羊としてご自身を献げようとしておられる。
- ②これは、偶発的に起こったのではなく、神の予定の成就である。
- ③最後の晩餐は、過越の食事の成就と主の晩餐の制定である。
- ④ゲツセマネから逮捕、裁判に至るまで、イエスは父の御心に従う能動的なメシアである。

命題：新しい契約は過越の成就である。

有罪宣言に至る5つのステップを見ればそれが分かる。

I. メシアの死は神の予定である (1~16節)

1. 十字架は神の時刻表に従って進む (1~2節)

Mat 26:2 「あなたがたも知っているとおりに、二日たつと過越の祭りになります。そして、人の子は十字架につけられるために引き渡されます。」

(1) 死の時が偶然ではなく、過越の時に一致するように定められていた。

- ①イエスは真の過越の子羊として死なれる。
- ②出エジプトの救いは、ここで究極的成就に向かう。

2. 人間の悪意も神の計画を破れない (3~5節)

(1) 祭司長、民の長老たちは「祭りの間はやめておこう」と考える。

- ①しかし神の計画では、まさに祭りの時こそ決定的瞬間であった。
- ②神の主権が勝つ。

3. ベタニヤでの油注ぎ (6~13節)

(1) この出来事は王への献身であると同時に、死に備える儀式的意味を持つ。

4. ユダの裏切り (14~16節)

(1) ここに、人間の罪の深さが現れている。

II. 過越の食事の成就として主の晩餐が制定される (17~30節)

1. 過越の食事の備え (17~19節)

(1) 弟子たちは過越の食事の備えをする。

①主の晩餐は過越と無関係な新儀式ではない。

②過越の成就から生まれた記念である。

2. 裏切り者の予告 (20~25節)

(1) 「あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ります」

①弟子たちは「まさか私ではないでしょう」と問う。

3. 主の晩餐の制定 (26~30節)

(1) 2つの宣言

①「これはわたしのからだです」

②「これは多くの人のために罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です」

(2) 聖書的背景

①出エジプト 24章の契約の血

②エレミヤ 31章の新しい契約

③過越が出エジプトを記念したように、主の晩餐はメシアの贖いの死を記念する。

④29節は、将来のメシア的王国における完成を指し示している。

III. 弟子たちの弱さの中で、メシアだけが従順を貫かれる (31~46節)

1. 弟子たちのつまずきの予告 (31~32節)

(1) 「あなたがたはみな、わたしにつまずきます」と言われる。

①ゼカ 13:7の成就である。

②羊飼いが打たれると羊が散らされる。

③メシア拒否の時、弟子たちもその衝撃に耐えられない。

④しかしイエスは復活後の再会をすでに約束しておられる。

2. ペテロの自己過信 (33~35 節)

(1) ペテロは「たとえ皆がつかずいても、私はつかずきません」と言う。

- ①彼は自分の弱さを知らなかった。
- ②人間の熱心さと霊的現実のずれがある。
- ③弟子の失敗は、救いが人間の忠実さにかかっていないことを逆に示す。

3. ゲツセマネの祈り (36~46 節)

(1) イエスは深く悲しみ、もだえ始められる。

- ①「この杯」とは、「神の御怒りの杯」である。
- ②ゲツセマネの苦悩の中心は、罪を担うことの霊的重圧にある。

(2) 「わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように」

- ①最後のアダムの完全な従順を示す。
- ②眠っている弟子たちとの対比が描かれる。
- ③救いを完成するのは人ではなくメシアご自身であることが明らかになる。

IV. 不当な裁きの中で、ご自分がだれであるかを証言される (47~68 節)

1. 逮捕 (47~56 節)

(1) ユダが群衆を連れて来る。

- ①口づけは親密さのしるし。ここでは裏切りのしるしとなる。
- ②弟子の一人が剣を抜くが、イエスはそれを制される。
- ③イエスは、自ら進んで御父の計画に従っておられる。

2. 大祭司による尋問 (57~68 節)

(1) 偽証が並ぶが、有罪は確定できない。

(2) 大祭司は「あなたは神の子キリストなのか」と問いたです。

- ①「あなたがたは今からのち、人の子が力ある方の右の座に着き、天の雲とともに来るのを見る」
- ②ダニエル 7 章と詩篇 110 篇を背景とするメシア的・神的自己宣言
- ③イエスは、終末に裁き主として来られる人の子である。

(3) 有罪判決と嘲弄

- ①大祭司は「神への冒瀆だ」と叫ぶ。

- ②彼らはイエスにつばをかけ、殴り、嘲る。
- ③メシア拒否は、ついに暴力的侮辱となって現れる。
- ④しかしこの拒否こそが、救済史の中で十字架への道を決定づける。

V. ペテロの否認 (69～75 節)

1. 三度の否認 (69～74 節)

- (1) これは、人間の決意の限界を示している。

2. 鶏の鳴き声と悔い改め (75 節)

- (1) ユダの絶望とペテロの悔い改めは対照的である。
 - ①失敗した弟子はなお回復の希望を持つ。
 - ②救いの基礎は弟子の忠実さではなく、メシアの血にあるからである。

今日の信者への適用

1. 過越の成就

- (1) 私たちの救いは神の計画に基づいている。
- (2) 過越の祭りの時に十字架が起こる。
- (3) ユダの裏切りさえも計画の中にある。
- (4) イエスは自ら進んで十字架に向かわれる。
- (5) 私たちは、自分の弱さに絶望する必要はない。

2. 新しい契約の血

- (1) 私たちは「新しい契約」に生きる民である
- (2) エレ 31 : 31 の成就
- (3) 新しい契約の特徴
 - * 罪の完全な赦し
 - * 心に書かれた律法
 - * 神との親しい関係
- (4) 教会は新しい契約の霊的祝福に参加している。
- (5) 信者は次の特権を持っている。
 - * 聖霊の内住
 - * 神との直接的交わり
 - * 罪の赦しの確信
- (6) 主の晩餐は、その恵みを思い起こさせる記念である。

3. メシアの従順

- (1) この章には、人間の弱さが強烈に描かれている。
 - * ユダは裏切る。
 - * 弟子たちは眠る。
 - * ペテロは否認する。
- (2) 重要なのは、イエスだけが忠実であったという点である。
- (3) 救いは、メシアの忠実さによって成し遂げられた。
- (4) 信仰生活の基本姿勢は、自己確信ではなく、主への依存である。
- (5) ペテロの失敗と回復は、希望を示している。

創造から新天新地へ—24章でたどる神の救済史

19章 「十字架—救済計画の中心」

マタイの福音書 27章

はじめに

(1) これまでの流れ

- ①創造 — 神は良い世界を造られた。
- ②墮落 — 罪によって死が世界に入った。
- ③契約の歴史 — 神は救済計画を進められた。
- ④メシア到来 — 約束の救い主が来られた。
- ⑤御国の提示 — イエスは御国を宣言された。
- ⑥イスラエルの拒絶 — 宗教指導者たちはメシアを退けた。
- ⑦新しい契約—過越の成就である。

(2) マタ 27章の意味

- ①十字架は偶然の悲劇ではない。
- ②それは、神の救済計画の中心である。
- ③旧約聖書はこの出来事を指し示してきた。

*イザ 53、詩 22 など

命題：十字架は敗北ではなく、勝利である。

この箇所を 3 区分して学ぶとそれが分かる。

I. 人間の罪が現れた裁判 (1~26 節)

1. イエス、ピラトに引き渡される (1~2 節)

(1) 宗教裁判では有罪が宣告された。

- ①しかし、サンヘドリンには死刑を執行する権利が与えられていなかった。

(2) イエスは朝早く、ローマ総督ピラトへ送致された。

- ①ローマの法廷で政治裁判が行われる。
- ②訴因は冒とく罪から反逆罪に変更された。

2. 裏切り者の悲劇 (3~10 節)

(1) ユダの後悔と自殺

- ①銀貨 30 枚を返す。
- ②「私は罪を犯した」と告白する。
- ③首をつる

(2) 血の代価の畑

- ① 神殿の資金にできない。
- ② この金で陶器師の畑を購入する。
- ③ エレミヤ書の預言の成就 (9~10 節)

Mat 27:9 そのとき、預言者エレミヤを通して語られたことが成就した。「彼らは銀貨三十枚を取った。イスラエルの子らに値積もりされた人の価である。

Mat 27:10 主が私に命じられたように、彼らはその金を払って陶器師の畑を買い取った。」

(3) 教訓

- ① 悔恨 (remorse) と悔い改め (repentance) の違い
- ② ユダは悔い改めの機会を逃した。

3. ピラトの裁判 (11~26 節)

(1) ピラトの尋問 (11~14 節)

- ① 「あなたはユダヤ人の王なのか」
- ② イエスは沈黙された。
- ③ ピラトは非常に驚いた。

(2) 群衆の選択 (15~23 節)

- ① 「おまえたちはだれを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか、それともキリストと呼ばれているイエスか。」
- ② 「十字架につけろ」

(3) ピラトの責任回避 (24~26 節)

- ① 手を洗う行為

Mat 27:24 ピラトは、語ることが何の役にも立たず、かえって暴動になりそうなを見て、水を取り、群衆の目の前で手を洗って言った。「この人の血について私には責任がない。おまえたちで始末するがよい。」

- ② 群衆のことば

Mat 27:25 すると、民はみな答えた。「その人の血は私たちや私たちの子どもらの上に。」

- ③ このことばは、紀元 70 年に成就した。

II. 王であるキリストの苦難 (27~44 節)

1. 兵士たちの嘲弄 (27~31 節)

(1) 総督官邸での嘲り

- ①紫の衣
- ②いばらの冠

(2) 偽りの礼拝

- ①「ユダヤ人の王、万歳」

(3) 十字架へ

Mat 27:31 こうしてイエスをからかってから、マントを脱がせて元の衣を着せ、十字架につけるために連れ出した。

2. ゴルゴタへの道 (32~34 節)

- (1) クレネ人シモンが代わりに十字架を負う。

3. 十字架につけられる (35~38 節)

- (1) 衣のくじ引き

- (2) 罪状書き

Mat 27:37 彼らは、「これはユダヤ人の王イエスである」と書かれた罪状書きをイエスの頭の上に掲げた。

- (3) 二人の強盗

4. メシア拒否の極致：嘲笑 (39~44 節)

- (1) 通行人

Mat 27:39 通りすがりの人たちは、頭を振りながらイエスをののしった。

Mat 27:40 「神殿を壊して三日で建てる人よ、もしおまえが神の子なら自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」

- (2) 宗教指導者

Mat 27:41 同じように祭司長たちも、律法学者たち、長老たちと一緒にイエスを嘲って言った。

Mat 27:42 「他人は救ったが、自分は救えない。彼はイスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおう。そうすれば信じよう。

Mat 27:43 彼は神に拠り頼んでいる。神のお気に入りなら、今、救い出してもらえ。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」

(3) 強盗

Mat 27:44 イエスと一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。

III. 救いを完成した十字架 (45～66節)

1. イエスの死 (45～50節)

(1) 全地の暗闇

(2) 「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」

2. 十字架の超自然的しるし (51～54節)

(1) 神殿の幕が裂ける

①贖罪の完成

②神殿制度の終焉

(2) 地震

(3) 聖徒の復活

(4) 百人隊長の告白

①異邦人の救い

3. 女性の弟子たち (55～56節)

4. ヨセフによる埋葬 (57～61節)

5. 墓の封印と警備 (62～66節)

今日の信者への適用

1. 十字架は、罪の深刻さを暴き出す。

(1) この章には、さまざまな罪人が登場する。

- ・ 宗教指導者
- ・ 裏切り者ユダ
- ・ 群衆
- ・ ピラト

- ・ローマ兵
- ・通行人
- ・強盗

- (2) 驚くべきことに、すべての人がイエスを拒絶した。
- (3) つまり、十字架は特定の人々の罪ではなく、全人類の罪の結果である。
- (4) 「彼らがイエスを十字架につけた」ではなく、「私の罪がイエスを十字架につけた」と言うべきである。

2. 十字架は敗北ではなく勝利である。

- (1) 人間の目には、十字架は完全な敗北のように見えた。
 - ・弟子たちは逃げた
 - ・群衆は嘲笑した
 - ・メシアは処刑された
- (2) 神の視点から見ると、十字架は救済計画の中心的勝利であった。
- (3) 神殿の幕が裂けたことは、その象徴である。
- (4) これは、神と人との隔てが取り除かれたことを意味する。

The Full Assurance of Faith

Heb 10:19 こういうわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます。

Heb 10:20 イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。

3. 十字架は希望の源である。

- (1) 百人隊長は、「この方は本当に神の子であった。」と告白した。
- (2) これは福音が全世界に広がることを示すしるしである。
- (3) 十字架はイスラエルの歴史の終わりではなく、世界救済の始まりである。
- (4) マタ27章は、人間の最大の罪と神の最大の愛が会う場所である。

次回はヨハ20章